

「漂流民宇三郎」論

——庶民文学の方法について——

江 後 寛 士

「漂流民宇三郎」の第19章に、念願の帰国を目前にした漂流民たちがエトロップ島に近づいてきたとき、松前の足軽小林朝五郎が国是を犯してロシヤ船に乗り込み、船長に所望されて和歌を揮毫する場面がある。

朝五郎は金蔵に命じ、蝦夷船に置いてある硯箱を取寄せて、船長から乞受けた紙に、六人の漂流民を引取った請取書を書いた。署名は「松前志摩守内、小林朝五郎」と書きつけた。それから船長に記念の揮毫を所望され、別の紙に柿本人麿の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に……」といふ歌と、また別の紙に百人一首の「これやこの行くも帰るも別れては……」といふ歌を書いた。この二枚を、船長は請取書と一緒に、貴重品を納める革づくりの箱のなかに蔵つた。

「漂流民宇三郎」は、記録文学と言うべき作品で、作中に典拠とされた四つの書名が明記されている。したがって、われわれ読者は、漂流民たちの稀有な体験の事実とともに、記録に添加されたであろうと思われる作者の創作部分を楽しみながら読み進むことができる。

名譽欲にとりつかれた足軽が、乏しい知識の中から「ほのぼのと……」や「これやこの……」を探し出し、得意になって揮毫する場面は、井伏特有の筆によって創り出されたものだ。誰しも思うにちがいない。このようなとぼけたおかしみが、原資料に記録されているとはとても想像できないだろう。ところが、原資料の一つである「時規物語」には、この記事が事実として記録されているのである。

朝五郎金蔵へ申付、蝦夷船に有之候硯箱を取寄、紙は船頭より乞受、六人の者を請取候趣相調、松前志摩守内小林朝五郎と書付、又人麿の、ほのぼのの

歌、外に巻首此歌は覚無之候、右を紙貳枚に書て請取書に添へ、船頭へ相渡候。(巻之六)

両者を読み比べてみると、井伏が創り出したのは、漂流民の忘れた二首目を「これやこの……」とした部分だけで、ほかは細部に至るまで記録そのままである。また、この朝五郎は、漂流民たちに向って、恩着せがましく、上陸できるのはおれのお陰なのだから「お取調べの節には拙者の身分出世方を宜しきやう申し立てるべし。」と言うが、これも漂流民が事実として陳述した記録の通りなのである。

このように、作者の創作だと思われたことが、記録の通りであったということになると、作者は一体何を創り出したのかという疑問が生じる。「黒い雨」についても、同様の疑問がもたれている。

だが、読後の印象から言って、両者には決定的な相違がある。無味乾燥な記録であったものが、井伏の筆にかかると、不思議におかしみが感じられ、生きた人間の姿が浮び上ってくるのである。足軽風情が日本を代表する役人であるかのようには振舞い、人麿の歌を揮毫する姿は、いじらしく、滑稽で、また、自分の出世を頼む意地汚なさは権力者の腐敗に対する嘲笑と憐憫をもよおさせる。この相違はどこからくるのか。

小説と記録の相違を、文学と非文学の相違と言ったのでは解答にはなるまい。一歩進めて言えば、筆者の批評精神の有無がその相違を決定づけるのではないかと思われる。漂流民たちは、奉行所のお役人の前で陳述させられた。彼らは、自らの体験や見聞に対して批評する態度を持つことは許されず、また持つ必要もなかった。彼らは、事実を思い起すままに陳述したにすぎない。記録の中にも、「ほのぼのと……」のようなおかしみの種はあった。だが、それを単なる事実として提出したにすぎない。漂流民たちの名前も記録の中にも随所に出てくるが、彼らは、血の通った人間として登場してくるわけではない。彼らの推測や感想の言辭

はあっても、批評精神は皆無である。作家井伏鱒二の批評精神は、記録の中の登場人物に血を通わせ、仲間同士の葛藤を創り出し、彼らの苛酷な体験をいとおしみつつ、ひたすら生きてゆく庶民の姿を定着させるのである。

「漂流宇三郎」の典拠については、作中に四篇が明記されている。そのうち、「時規物語」と「蕃談」は『日本庶民生活史料集成』第五巻によって手近かに見られる。これらを参考にして、記録と文学、とりわけ井伏鱒二の方法の特色について考えてみたい。（「異国物語」と「漂流聞書」は未見。特に前者は表題にとられている宇三郎の談話を記録したものであり、その他は彼の存在を抹殺した記録であるだけに、この「異国物語」は必見の文献と思われるが、入手できないのでやむをえない。）

なお、これらの資料の性格について少しふれておこう。「時規物語」は、加賀藩算用奉行遠藤高博らが四名の漂流民について調査し、科学的、客観的に事実を叙述した、全十巻、図録二百余枚の膨大な資料である。これに対して、「蕃談」は、蕃書取調所頭取の古賀謹二郎が次郎吉の談話を記録したものであるが、解題によれば、「古賀が次郎吉に托して自己の開国思想を述べたと見られる点が少なくない」という偏りがある。そのためか、井伏は、「蕃談」をあまり利用せず、ほとんど「時規物語」にしたがって書き進めている。「時規物語」にないのは、大きな事柄では、宇三郎が二粒の粉をまいて稲を育てる話と、ロシアでの芝居興業の話ぐらいのものである。これは「異国物語」によったのかも知れない。

二

さて、さきに述べたように、「ほのぼのと……」の歌が記録にあったのは驚きであったが、記録と創作との関係が予想通りと思われる部分について見ても、いろいろの興味深い問題がある。

長者丸が漂流しはじめて三か月経った頃、飢えと渇きの苦しみの中で、五三郎は、味噌桶にたまった水を飲んで腰をぬかして死ぬ。その時のことを「時規物語」は次のように記している。

桶に味噌を計残り有之内へ、高波のせつ打入候潮一杯に成居候を、五三郎渴のあまりに多く呑候ところ、それより疲労^{あつ}まじし、腰ぬけ、廿四五日ごろ、夜中いづれも一集に臥り罷在候内、いつしか相果居候に付、いづれも念

仏を唱へ、死骸は一兩日指置兼て申合候通、海へ沈め、船中をきよめ申候。同廿六日朝夕々にて半日計雨降、人々限りなく喜び、思ふ儘呑申候。

（巻之一）

井伏は、この記録にもとづいて方言色豊かな会話を駆使し、陸を待ち望む心情をからませて、リアルな場面を構成している。

盆栽のわずかな土に生えたかたばみの芽に希望を見出し、飢えた漂流民たちが、これは食べられるかもしれないと評定しているとき、五三郎が横あいから手を出してむしりとりて食べたのであるが、腰がぬけたのは、その報いかもしれないという不安として描かれる。記録は、味噌桶の汁を飲んで腰をぬかして死んだというだけのものであるが、井伏はこの記録を生かすために、これだけの場面を用意するのである。さらには、五三郎の病状について、「氣附薬の水を貰ひたいために仮病をつかつてゐるのでもなさうであつた。」という、皮肉めいた説明まで加えるのである。

いま一つ注目し値することは、右の記録の終りに見える、雨が降って渇きの苦しみから救われたという記事をもとに、漂流民同士の葛藤をさりげなく描き出していることである。

夕立が今度またいつ来るのかしれないので、みんな嬉しく申合せて、朝と昼と夕の三回に、一人が一合入の茶碗に一ぱいあて飲む規約にした。

「仏様にも飲みたてやるまいか。さぞ飲みたかつた事やらう。」

善右衛門は、自分の飲むぶんの水を死人の口につしこまうとしたが、齒を喰ひしぼつてゐる口は、その貴重な水を受けなかつた。

「五三郎、お前は仏様になつても、まだ儂に桶突く氣か。なぜにお前は儂が憎いがや。さあ飲め、今生のお別れぢや。」

善右衛門と五三郎は、船が漂流して以来ことごとく角突きあつていたのであつた。「時規物語」には、雨水を貴重品のごとく扱つたという事実しか書かれていないのだが、井伏は、このような仲間同士の葛藤にまで仕立て上げていたのである。こうした葛藤はこの作品のテーマに直結しているわけではないが、彼らの感情のもつれや葛藤は、いろいろな組み合わせでいくつも起り、それが少しずつこりを残して、ストーリーの底から時々浮び上り、最後の宇三郎の帰国断念にまで進むことになる。こうした葛藤の場面を、右のような雨水を受けて飲んだという

小さな記事から創り出すところに、記録を文学に仕立て直そうとする作者の意図を認めることができる。(ただし、作中の「異国物語」からの引用を見ると、仲間同士のいがみ合いが若干記されているので、これにヒントを得たとも考えられる。)

漂流民たちは、六か月の漂流のち、アメリカの捕鯨船に救われて、ことばの全然通じない異人に行水をつかわせられる。水夫が甲板に大鍋をすえて湯をわかすのを見て、漂流民たちは煮て食われるのではないかと騒ぎ合う。鍋の水を確かめると真水なので、「煮て食ふなら、潮煮にするにきまつる」と太三郎が断を下す。不安のうちに鼻の赤い異人に着物を脱がされ、最初次郎吉が引き出されるのであるが、行水とわかると、彼は湯のこぼれを飲むとする。異人はそれをさせまいとする。行水を終って仲間の所に帰った次郎吉は、「お湯はの、頭の下で手に受けて、こっそり飲むが要領やぞ。」と先達の口伝をした。みんなはその口伝に従ってたらふく水を飲んだのであった。

この場面は、やや誇張の過ぎたきらいはあるが、救出されたものの、赤ら顔の異人や異様な黒人にどんな目にあわされるか知れたものではないという不安と、想像もつかぬことをさせられるときの切迫感とが、十分に描き出されている。読者は、煮て食われることはないと知っているので安心して読むだけのことである。この緊迫した、しかもユーモラスな場面が、「時規物語」では、次のような淡々とした記述にすぎないのである。

此船に乗り移り候て三四日目に、鹽たらいを持出水を七分目計入れ、行水をつかはせ候。其節びん繪身へ鬢附びんの様成ものをぬりて洗ふに、泡立て垢すきととれ申候、この水目にしみ申候処、目をふさぎ候様にしへ候。(巻之一)

このように、記録には、かまゆでの不安も水を盗み飲んだ喜びも書き残されていないのである。そこに、記録と創作の相違が認められる。また、右の記録では、行水よりも、石鹼という未知のものに対する驚きの方が重要視されているが、井伏はこれを採用していない。このことは井伏が記録から何を選び、何を捨てたかという大きな問題にかかわってくるが、のちに触れることにする。

右の例と同じく、平四郎が持っていた春本を異人が欲しがらるくだりも記録は簡単である。

船頭平四郎小き春画巻枚所持いたし居候処、船中の者どもいづれも所望い

たし候に付、遣し候事有之候。(巻之三)

記録はこれだけのものであるが、井伏は、「オオ、ゲブメ。ヨーレイケ・ゲブメ」「ノーゴリ」「ワンダフル」といった会話を配して、先を争って手を出し、立ち騒ぐ異人たちの様子を描き、「異人が騒ぐのも無理はない。それは船頭平四郎所持の春本を、その第一頁の彩色画のところが開かれたからであった。平四郎は筐底の秘密を暴かれたので、よい年をして泣き面になつてその書物をひつたくると、筒袖着の脇穴にねちこんだ。」と記す。平四郎が泣きたいほど恥しい思いをしたのは、彼が船長で、しかも年長の五十一歳だったからである。この場面は異国船に救出されたその日のことであるにもかかわらず、平四郎のこの反応は、六か月の漂流で半病人のようになっていた人間のものと思えない日常の匂いをもっている。このような、異人や仲間を前にしての、性に対する羞恥心は記録には一言も書かれていないのであるが、井伏は、血の通った人間の心情を、当然のこととして与えているのである。

また、ハワイでこっそり女を買ったこと、粹な病気をもらってロシヤまで持ち歩き、ついに命を落す七左衛門のことなど、井伏は、性に関する場面を多く設けているが、記録では、七左衛門の病氣と、外地にも遊廓があったことを記す程度である。

以上のように、羞恥心、緊迫感、仲間同士の葛藤など、記録にはないものを井伏は創り出して、小説の世界を構築していくのである。否、構築というのは当らないかもしれない。「漂流民宇三郎」は、長篇小説のもつ建築物のような有機的な構造をもっていないように思える。井伏にとって大事なのは、漂流民たちの運命や人間的成長ではなく、彼らが、その場その場においてどう生きたかという姿なのである。生死にかかわる逆境にあつての葛藤は、結局、宇三郎に帰国を断念させるほど重大な事柄であるが、「漂流民宇三郎」は、宇三郎の性格悲劇のドラママではなく、「海神丸」のようなテーマ小説でもない。作者は、宇三郎を主題に掲げているが、宇三郎を主人公とし、彼の悲痛な運命をドラマ化する意図はもっていないかたようである。井伏は、漂流民たちの遭遇する稀有な体験の一つ一つに目を凝らし、そこに人間の真実の姿を見ようとするのである。

例えば、次のような場面がある。帰国に際し、祝い酒をふるまってくれる代官ナチヤニカの好意に対して、漂流民たちは意識的に喜びを表わそうとする。「漂流民たちは、い

まの自分たちの立場として、ロシアの文明開化の有様に驚嘆するふりをすべきだといふことを知つて」いて、時計をほめあげた。その結果、これを土産にやろうということになるのだが、井伏は、「お世辞の菓が効きすぎた」と暴露的説明を加える。記録では表題にまで掲げられた時計の一件であるが、小説では、この場面はこだけで完結していて、ドラマを作り出す機能はもっていないし、一篇の象徴の意味ももっていない。

このことは、単純な記録に心情を加え、緊張感をもたせ、葛藤まで生み出すという小説作法に、一見そむくように思える。だが、現場主義とも言つべき井伏の方法においては、矛盾しないのである。

開高健は井伏文学の細部と全体について次のように語っている。

ディテールでかためている怪物に井伏鱒二さんがいる。この人はディテールだけでかためているんだけど、まことに堅牢無比。まるで小作農みたいに事実しか信じない……。 (中略) 細部だけでかためて、それで全体がもつてるでしょう。本質なんだ、どこもかしこも。 (対談 ポルノと現代文学)

『文学界』昭和四六・一一)

たしかに井伏文学は、「細部だけかためて、それで全体がもっている」のである。そして、その全体は、「漂流宇三郎」は、抽象的、観念的な思想性をもって、何か一つの世界観を主張しようとはしない。むしろ、彼は、そのようなものを忌避する。それは、彼の好んでとりあげる庶民には無縁のものだからである。井伏は、人工的な実験装置の上に人間をのせて絵空事を創り出すことを好まない。たとえ、それが真実と見えても、この世ならぬ世界は所詮ウソだからである。記録をふくらませて創作した部分に、人工的な虚構の匂いがなく、日常的な事実と同質のものと思われるのはそのためであろう。

三

漂流記という素材は、もっとも非日常的な性質を有するものであるから、悲劇的あるいは英雄的冒険譚に仕立てることは、むしろたやすい。しかし、井伏はそれをしりぞけ、非日常の世界に日常的な人間の姿を定着させようとする。したがって、前節で示したように、記録をふくらませて創作部分を加える反面、それを抑制し、特に心理的な面に深入りしないように留意している。

漂流民たちの一番の関心事は、故国日本へ帰ることである。漂流中はひたすら陸を恋しがり、救われてハワイへ行ってからも、日本への便船が得にくいとわかると、オホーツク、カムチャッカまで足をのばすほど望郷の念は強い。故郷を思い、涙する場面は数多くある。しかし、それを抒情的にうたいあげることにはしていない。次はその典型的な例である。

「カベタン殿、おそれながらお訊ね申します。」

次郎吉がさう断つて、この海上は日本の加州金沢からどのくらゐの里程の地点に当るか質問した。船長は世界地図を掲げると加州金沢の位置を示して、たちどころに英里でその里程を答へた。英里の一哩は日本の約十四町十五間七寸余に当る。次郎吉がメリケン式の算盤法で算用すると、この海上は加州金沢から直道一千六百七十九里三十丁強であつた。

「遠いのう、無茶苦茶に遠い。」

と年長の八左衛門が泣くやうに云つた。

これは、いよいよ帰国ときまつて、蒸気船を見物に行つたときのことである。この里程は記録の通りであるが、「時規物語」には、その数値が示されているだけで、八左衛門の感慨は記されていない。井伏は、この正確な距離を提示し、「遠いのう」という一言を添えることによって、漂流民の痛いほどの望郷の念を表現したのである。帰国することになったのであるから、その喜び、故郷のこと、長年にわたる苦難、帰れるとはいっても蝦夷地の小島にこっそり上陸するのだし、どのようなお咎めを受けるかもしれぬ、また、いかなる不測の災難がふりかかってくるかもしれないという、さまざまな思いがあつたであろう。だが、井伏は、「遠いのう」という切ないことを吐かせるだけにとどめ、抒情に流れることを極力おさえるのである。そこには、自然主義的な追究も、知的な心理分析もない。

長者丸に火をかけて焼くところも同様である。船頭の平四郎は火があがるのを見ると、「おお、船が燃える」と悲痛な声を発して、よろよろと二三歩前に踏み出す。六か月間の漂流という苛酷な運命を共にしてきた船が焼かれるのであるから、感慨もひとしおといったところであろうが、井伏は深追いせず、「なんの親方、無人の捨船やもん。夜中、船の往來の障りになるよつて、火をかけたのやろ。」と次郎吉に言わせるだけで終るのである。

仲間の死についても同様で、いたづらに泣き悲しんだりはない。水葬する場面も、記録とほぼ同じであり、平四郎がハワイで死んだときも、板で作った墓碑の大きさと形、碑文などを克明に記すだけである。（これは「番談」に明示されている通り）

漂流中、長さ一丈にあまる鰈を捕えようと、煮湯をかけたたりして大格闘するが、とれたら十人が十日食べても食べきれまい、当分は左扇團というものだと期待しながら、とり逃がしても、彼らの落胆ぶりは少しも書かれていない。書かれているのは、釣鉤の折れ具合だけである。

このように、心理描写を極力避け、ただ事実だけを克明に記す態度は、あたかも、記録の手法を模倣しているかのようである。模倣と言うより、記録そのものから方法を学びとったと言った方がよいかもれない。作者は事実の背後にいて、記録された多くの事実の中から必要なものを選びとり、配置するのである。作者は、作中で自己主張はしないが、事実の処理に際しては、強固な批評精神を発揮するのである。

井伏の批評精神とは、例えば、富士山を美しいものとする安直な概念を否定して、「その山の東西南北の山裾の土地は、さぞかし寒いことだらう。高い山は雲を起し風を呼ぶ、ろくなことはない。」と言うような、現場を尊ぶ庶民の精神である。「三四郎」の広田先生が、上京中の三四郎に向かって、日本で自慢できるものは富士山しかない、と言っているのを考え合わせると興味深い。

概念は、知識人にとっては大切であっても、このような、生活に根ざした庶民の目の前では無力なものでしかあるまい。

四

このように考えてくると、「漂民宇三郎」は、例えば、開高健のルポ「ペトナム戦記」の質と相似たものではないかと思われるのである。それならば、「漂三郎」はルポルタージュかというところではなく、関係はむしろ逆で、「ペトナム戦記」にこそ、単なるルポルタージュを超えた、文学の新しい可能性を見るべきなのである。

「漂民宇三郎」は、漂流と流浪という、極限的な、概念化されやすい素材に、庶民的日常性をもたせるといふ困難な方法で作られている。「時規物語」には、例

えば、はじめて石鹸をつかったときの驚きに見られるような、捕鯨法、砂糖の七ぼり方、井戸のポンプなど外国の珍らしい風俗、習慣、それに加えて、船舶、航法、兵器など、当時の為政者が知りたがっていたことが数多く記録されている。「番談」の開国思想、あるいは、宇三郎が帰国しなかったことにしても、鎖国政策と無縁ではないのであるから、これらをもとに、鋭い文明批評を試みることもできたはずである。だが、井伏はそれをしない。彼は概念化された世界観をもつ人物を作ろうとはしないのである。

「ペトナム戦記」の開高健は、「輝ける闇」を書いた。後者には、世界観の押し売りが感じられるが、前者にはそれがなく、記録映画と同質の感動がある。「輝ける闇」の「私」は、自己を対象化しうるが、漂民たちは、自分の気持さえ表現する方法を知らない。

オイレンの嫉妬に困り果てた宇三郎は、自分の現在の心持は、百人一首で言えば誰の歌に似ているのだろうと考える。「秋の田の苜蓿の庵……」でもなく、「久方の光のどけき……」でもなく、「春すぎて夏来たるらし……」でもない、と、知る限りの歌を口のなかで繰り返すのである。

井伏は、自分の力で自己を対象化し、自分の気持を自分の歌で表現することを知らない庶民、自ら世界観を切り開いていく道をつかぬ庶民、しかし、ただひたすら生きていく庶民を、いとおしみつつ書きつけていくのである。

杉浦明平は、井伏の文学を、庶民文学だとして次のように言う。
「そういう人々はこの社会的激変の渦の底に、一瞬にして呑みこまれてしまふ一枚の枯葉にも及ばないかもしれない。そしてこの変動が終わったとき何のあとかたも残さないにちがいない。」

庶民とは、このようにはかない存在であろう。しかし、その「一枚の枯葉」を、井伏は、われわれの掌の上に載せてくれ、確かな手ざわりを与えてくれるのである。この「一枚の枯葉」のような庶民を創り出す方法は、井伏の文学全般に認められるものであり、「漂民宇三郎」においても、有効に働いていると言えるであろう。